
特別論文

40 有余年を振り返って

田口 弘康[※]

My Late Forty Odd Years

Hiroyasu Taguchi

大学に勤務しながら、研究者としても中途半端、教育者としても満足な勤めを果たしてこなかった私のような者の定年退職を記念して、生活福祉学科紀要の特集を組むという話が持ち上がったとき、正直なところ当惑しました。しかし、決まった以上は、赤恥を曝す覚悟でこの企画に臨むことにし、およそ40年前からのことを振り返ることにしました。諸先生方から教えて頂いたことをご紹介することで、教育者として不十分だったことへの埋め合わせにしたいと思います。

また、この企画に当たり、色々な面でご恩になった方々に寄稿をお願いしました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

研究に関すること

私は何かにつけて恵まれた半生を送らせて頂いたと思いますが、特に指導者には恵まれました。私の研究についてお話しする中で、その紹介をしたいと思います。

①名古屋大学時代

私が名古屋大学理学部に入学した年(1959年)の9月に伊勢湾台風が名古屋を襲い、多くの学友が被災しました。教養部は休講となり、私が1年生だった学年の後期はほとんど授業がありませんでした。2年生になると、いわゆる「六十年安保」で全国の大学が揺れ始め、名古屋大学の教養部も無期限ストライキに突入し、校舎はバリケードで固められ授業はできなくなりました。ストライキは、7月に日米安全保障条約が批准されるまで続きました。その間に東京では、東人文科の学生だった樺美智子さんがデモ隊と警察とのぶつかり合いの中で亡くなるという痛ましい事件も起きました。このように、ほとんど授業を受けることの無い激動の1年を過ごし、学問に対して懐疑的になり、成績は下がる一方でしたが、そ

の頃「則天去私」という言葉を知ったのが唯一の収穫でした。その後、この言葉は私の心の中に留まり、戒めとして働いています。

化学科を志望していたのですが、成績が悪く進学することは許されませんでした。1年留年して再度挑戦することにしたのですが、この1年間で私の進路を決定することになりました。それは、松浦貞郎先生との出会いでした。

松浦先生は当時オーストラリアから帰国されたばかりの若い助教授でした。私は先生の研究室に通って、文献の読み方、実験の基礎的なテクニック、実験ノートの書き方等々、通常のカリキュラムには無いことを教えて頂きました。先生はオーストラリアの大学院教育の素晴らしさを紹介して下さいたり、専門課程に進んだら平田研に入ることを勧めたりと、私の進路について色々なアドバイスを下さいました。松浦先生からは、基礎的な実験技術はもとより、私の人生の方向を決める指針を頂いたと思っています。先生との出会いが無ければ、私の人生は全く違ったものになっていたでしょう。

お蔭様で何とか化学科に入れて頂くことができ、4年生では平田研に配属されました。(故)平田義正教授は当時まだ40代半ばの若い研究者でしたが、機器分析という新しい手法を駆使して、天然に微量にしか存在しない生理活性を有する多くの天然有機化合物の構造を決定されており、すでに世界的にその名を知られていました。

平田先生ご自身も実験をされており、特に研究のキーとなる部分や、新しいテーマに入られるときには、必ずご自身で確認されていました。先生の研究に対するこの姿勢は、お弟子さんたちに引き継がれ、名古屋大学は勿論、アメリカのコロンビア大学、ハーバード大学をはじめ、東京大学、東北大学、京都大学など多くの有名な大学の教授が輩出されていますし、企業でも多くの方が活躍されています。研究者としてだけでなく、このよう

[※]京都女子大学家政学部生活福祉学科教授

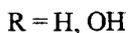
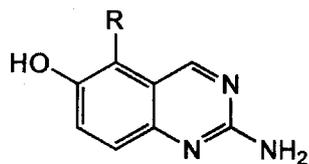


図1 フグの毒テトロドトキシンの分解産物

に教育者としても卓越されていた先生は晩年、文化功勞者にも選ばれておられます。先生は、「何年か先にどんな仕事をしたらよいか、若いうちから考えておきなさい。」と常々おっしゃっていましたが、私はそれを実行することができず、先生から教えられたことで辛うじて実行できたと思うことは、学生にテーマを与える前に自分自身である程度実験をしておく、くらいのことでした。

当時、テトロドトキシシン（ふぐ毒）とウミホタルシフェリンに関する仕事が平田研の重要なテーマで、助教教授だった（故）後藤俊夫先生を中心に研究が進められていました。私も後藤先生の下で卒業研究を行い、その後の2年間も後藤先生のご指導の下、研究をさせて頂きました。先生は30歳を過ぎたばかりの優秀な研究者で、私には近寄り難い存在でした。しかも、「具体的な指示をしたら、学生は育たない。考えさせることが重要。」という指導方針を貫いておられましたから、私が相談しに行っても「考えなさい。」という答がほとんどでした。このような状態で、私の足は次第に先生から遠のくばかりで、その結果、研究は進まなくなって行きました。

研究生生活の終わりに、先生は遂に雷を落とされました。説教は長時間に及びましたが、その骨子は「仕事をする以上、研究が進んでいるときも進んでいないときも、仕事の内容についてお互いに共有していることが肝心。上の者が仕事を押し付けることはできないから、実際に実験している者が上に報告するのが絶対条件。そうでなければ研究は進まない。」というものでした。後藤先生が何を考えて私に接しておられたのか、その時はじめて理解できました。先生のこの言葉は、私のその後の人生に大きな影響を与えました。本当に有難いことです。先生の強い叱責があったからこそ、田辺製薬株式会社に就職してから、「上司への報告は、日に2回以上」という日課が習慣付けられたのだと思います。

名古屋大学時代の仕事としては、テトロドトキシシンの分解産物（図1）の合成があります。

②田辺製薬株式会社時代

1964年に名古屋大学を卒業すると同時に田辺製薬株式会社に入社したのですが、最初の2年間は、平田先生

のご配慮で、平田研に研究生として残ることになりました。しかし、この2年間で仕事らしい仕事もできず、平田先生のご好意に報いることができなかったことを大変申し訳なく思っています。

ところで、会社の入社式での中林社長の訓示は、今も耳に残っています。1つは「利己と利他を合一せよ。」であり、もう1つは「無益な中元、歳暮は慎め。」でした。私は今なお、この言葉を守ろうと努力しています。

名古屋大学での研究生を終えて会社に戻った私は有機化学研究所に配属され、新入社員ばかりが田中雅課長の下に集められました。会社では、全員が同程度のテクニックを持って実験をする必要があったので、田中課長がその共通基盤を作る教育係を勤めておられたのです。課長には“会社で行きぬくには、競争に勝つこと”と教えられ、競争意識を植え付けて頂いたと思います。

その後、釘田博至部長の研究室に異動になりました。この研究室では、鎮痛剤の開発が行われており、すでに多くの薬を世に出していました。私に与えられたテーマは、メセンブリンの別途合成法の開発で、これは大石篤郎係長の仕事の手伝いでした。

釘田部長は、仕事以外のことではほとんど口をきかれることはなく、昼休みもjournalに目を通されるか、Japan Timesを読んでおられるかのどちらかでした。「研究者は孤独だ。孤独に耐えられなければ研究はできない。」とおっしゃったことがあります。ご自身それを守っておられ、部下の評価に私情を挟まないように努力されていたように思います（釘田部長は、その後、本社に移られ、開発本部長として、また取締役の一人として活躍されたのですが、その当時の釘田部長は冗談も多く、実に気楽にお話ができる存在になっておられました）。釘田部長から教えられた中に、「研究は押すことも大切だが、もっと重要なことは引くタイミングだ。」というのがあります。このことは、研究に限ったことではなく、人生一般に通用することだと思えます。引くことの重要性を、身をもって教えて下さった釘田部長に心から感謝しています。

大石係長は、「人をよく観察しろ。そして、人事異動の際に自分の判断と会社の判断を比較して、人を観る眼力を養え。」とおっしゃって、私が他人をどのように観ているかを時々試されました。この影響で、「組織」というものについて考えるようになり、その頃から「組織はリーダーを頂点とするピラミッドとして考えられ勝ちだが、ダイヤ型ではないのか？」と、思うようになりました。そして、組織を強くするには、リーダー、批判勢力としての両翼、そしてボトムの4角をしっかりさせる

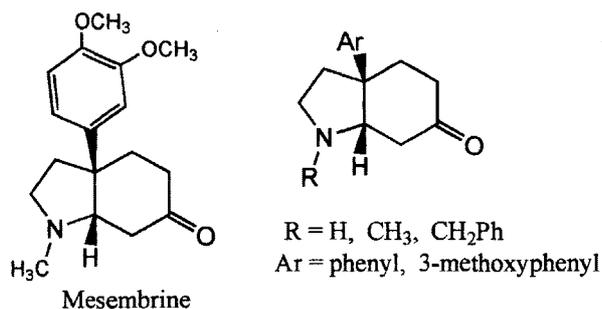


図2 メセンブリンとその類縁化合物

必要があるとも思いました。リーダーの庇護無しではボトムは務まりませんので、私は自分自身をボトムに置くだけの勇気がありませんでした。そこで、組織のために、せめて批判勢力としての両翼に位置できるようにはなりたいたと考えて勤めるようになりました。

1969年の夏、プテリジン(含窒素複素環化合物の一種)に関する国際シンポジウムが三重県の鳥羽で開かれ、私も出席することになりました。そこに、名古屋大学の松浦先生の先生であった(故)Albert教授も出席されていて、Albert教授から「キャンベラでPhDを取る気はないか?」と聞かれ、このときから、オーストラリア行きの話が進むようになりました。

田辺製薬株式会社に在職している間の仕事としては、メセンブリン関係の研究以外にもいくつかあり、20報ほどの特許を出しましたが、論文になったのは、メセンブリンの類縁化合物としてのオクタヒドロインドール誘導体(図2)の合成だけです。

③キャンベラ時代

1970年1月、オーストラリアのキャンベラにあるオーストラリア国立大学基礎医学部・医化学教室の博士課程に入学しました。修士号を持たない私が直接、博士課程に入学できたのは、ひとえに名古屋大学の平田先生と松浦先生の強い後押しのお蔭でした。それだけに緊張感も強く、またテーマとして与えられた含窒素複素環化合物を扱うのも初めての経験でしたので、非常に不安な出発でしたが、それでも何とか続けられたのは、副指導教官のBrown博士のお蔭でした。というのも、私が博士課程を始めて2ヶ月が過ぎたとき、主指導教官のAlbert教授が1年間の予定で客員教授としてイギリスに行ってしまうからです。

Brown博士は、いかなるときも笑顔を絶やさず、オフィスをノックすれば、いつもニコニコしながら迎え入れて下さいました。本当に忙しい先生でしたが、決して「待て」とはおっしゃりませんでした。Brown博士のこの寛容さに私は救われたのです。これはAlbert教授も同じで、

学生を大切にするこのような対応は、医化学教室全体に行き渡っていたように思います。

ここで、いかに学生が大切に扱われていたかを示すひとつのエピソードを紹介したいと思います。ある時、Albert教授のオフィスで、私の研究について話をしている最中に、秘書が「役所の方が研究費のことで来られています。」と言いに来ました。Albert教授は「待たせておきなさい。」とおっしゃって私との話を続けられ、小1時間ほど役人を待たせてしまわれました。私は心配になって「大丈夫ですか?」とお聞きしたのですが、「お前との話の方が重要。結論を急ごう。」とおっしゃって、役人を待たせても平然とされていました。私は研究費獲得の困難さについて、その頃すでに知っていましたので、教授のこの対応は強烈な印象となって残っています。

Albert教授は常々「実験は自然との対話だ。素直な気持ちで実験しないと、自然は真当に答えてくれない。」とか「常に科学的であれ。」とおっしゃられ、科学の本質について教えて頂いたように思います。結果を求める傾向が強く、客観的な姿勢に欠けていた私の態度を見抜かれていたのだと思います。また、Brown博士には、いつも「Challengeしろ。」と背中を押されました。私が結果を恐れて冒険しないのを注意されていたように思います。

私には、Albert教授、Brown博士の正式な指導教官の他に、Armarego博士という、後に共同研究をさせて頂くことになる、陰の指導者がいらっしました。Armarego博士は、当時まだ40歳前の最年少のスタッフでした。Armarego博士の研究室では報告会の他に、新着雑誌からトピックスを紹介するセミナーが開かれていました。私もこのセミナーに参加して、主に天然有機化合物の全合成に関する論文を紹介しました。各人が発表した後、その論文についての議論が始まるのですが、Armarego博士は必ず、「お前なら、その仕事をどう展開するか?」と質問されました。研究の進め方を考える良い訓練の場になったと思っています。

博士課程在籍中に、8-アザプリン類、1,2,3-トリアゾール類の合成に加えて、紫外スペクトルに関して、新しい知見を得ることができました。それは、2-アミノピリミジン誘導体のカチオン(図3a)の紫外スペクトルが2-オキソピリミジン誘導体の中性分子(3b)のスペクトルに非常によく似ているということです。これは、アニリン誘導体の紫外スペクトルとフェノール誘導体のアニオンのスペクトルが酷似しているという“Jones Rule”と、ある意味で対を成すということで、現在では“Albert-Taguchi Rule”と呼ばれています。8-アザプリン

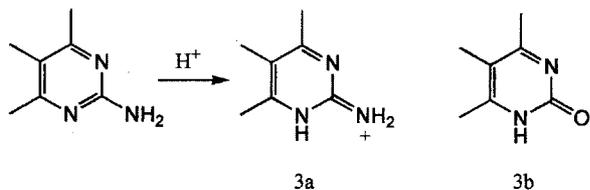
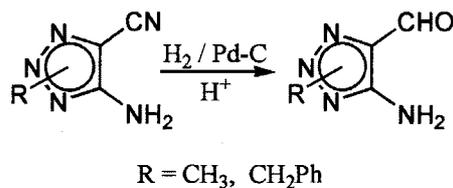
図3 2-アミノピリミジン類にH⁺が結合したときの構造 (3a)

図5 ニトリルからアルデヒドへの一段階合成

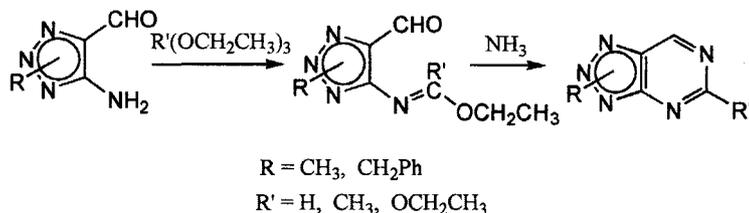


図4 オルト酸エステルを用いた新しいピリミジン閉環法

類の合成では、オルト酸エステルを用いたピリミジンの新たな閉環方法 (図4) を開発しましたし、1,2,3-トリアゾール類の合成では、シアノ基を強酸性条件下で接触還元することにより、アルデヒド基に変換するというアルデヒドの簡便な合成法 (図5) を開発しました。

④ジョンズホプキンス大学時代

Brown 博士の友人で、ジョンズホプキンス大学公衆衛生学部・生化学教室の教授をされていた (故) Wang 先生に、1973年1月から研究員として雇って頂くことになりました。Wang 教授は中国本土からアメリカに渡ってこられ、アメリカで教育を受け、有機化学から生化学に転向された方で、皮膚がんに関して、紫外線照射によるDNAの修飾について研究されていました。Wang 教授はアメリカで成功した外国人らしく、「アメリカで成功するには、アメリカ人の1.3倍働く必要がある。」と常々おっしゃっていました。

Wang 研究室では、すでにチミンの修飾についてはほぼ終わっており、シトシンの紫外線修飾に関心が移っていました。シトシンに紫外線を照射して紫外スペクトルを測定すると、240 nm に吸収極大が現れるのですが、この吸収が何に起因するのか不明でした。私に与えられ

たテーマは、この240 nmの吸収を有する化合物の構造を決めることでした。

紫外吸収を240 nmに有する化合物 (図6a) そのものは不安定で、純粋に取り出そうとすると、加水分解されてウラシルの還元体 (6c) に変化してしまうことに気づきました。そこで、何種類ものシトシンの還元体を合成し、片端から紫外スペクトルを測定することにしました。シトシンの還元体は不安定なものが多いので、生成するや否や結晶として析出させる、という手法で単離し、手早く紫外スペクトルを測定しました。この結果、240 nm に吸収極大を有する構造は6aに示すような還元型シトシンであること、またこのものはイミノ型 (6b) と互変異性の関係にあり、環に歪みがかかるとイミノ型が優先するようになることを明らかにし、イミノ型 (6b) は容易に加水分解されてウラシルの還元体 (6c) に変化することも示しました。ジョンズホプキンス大学時代に発表した6つの論文は、すべてこれらの関係を明らかにするものでした。このようにして、生化学の分野における問題を、有機化学的な手法で解明することができたのです。このことが京都女子大学に職を得てからの私の研究の方向を示唆してくれたように思います。

⑤ハーバード大学時代

平田研究室の3年先輩に当たる岸義人博士がハーバード大学の正教授に就任されることになり、1974年11月から私も研究員として雇って頂くことになりました。岸教授はテトロドトキシン (ふぐ毒) の全合成をはじめ数々の天然物の全合成を、次々に成功させておられた若い研究者でした。研究室は非常に活気があり、24時間電灯が消えることはありませんでした。なぜなら、夜遅くまで働く研究員が帰宅する頃には、朝早くから働く研究員

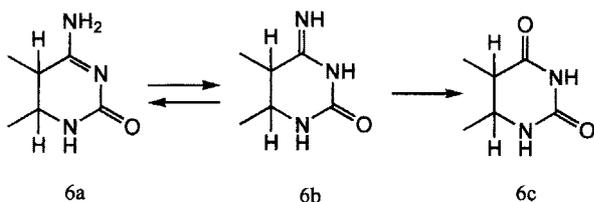


図6 240 nm に吸収極大を有するジヒドロピリミジンの構造 (6a) とその互変異性体 (6b) および加水分解産物 (6c)

が出勤してくるからです。朝型であれ、夜型であれ、全員が1日に16時間以上働いていました。岸教授は私たちに「反応は24時間休みなくかけてくれ。1日に5つ以上の反応をかけて処理してくれ。」とおっしゃっていて、皆、それを忠実に守っていたからです。毎日、5つ以上の反応を計画し、実行するには、常に「次の手」「次の手」と考えていかねばならず、休む暇はありませんでした。岸教授は「研究は短距離レースの連続であって、決して長距離レースではない。毎日が競争だ。」とおっしゃっていましたが、岸研はまさにその言葉を地で行く場でした。私は、当時すでに34歳で、研究員としては年寄りの部類に入っていましたので、日曜日に休むことを許されましたが、他の人達は正月の元日以外は休まず働いていました。岸研での生活は、毎日が緊張の連続で厳しいため、我々研究員はよく「岸はSlave Driverだ。」などと愚痴をこぼしていました。しかし、今となってみると、あの雰囲気や強圧的な手法を用いないで創り出した岸教授の手腕に感服するとともに、よい経験をさせて頂いたと感謝しています。それというのも、あの時の経験が私のその後の人生に自信を与え、大きな支えとなったからです。

ハーバード大学には、岸研以外にも Woodward 教授 (1965 年ノーベル化学賞受賞)、Corey 教授 (1990 年ノーベル化学賞受賞) の研究室など有機化学の研究室がありました。どこも同じような状況でした。アメリカで一流を維持しようとするれば、これ位はしないといけないでしょう。だからこそ、どんなに不景気になっても、企業の方からハーバード大学にスカウトに来るという「ハーバード神話」があるのだと思います。私がいた頃にも、毎日必ず複数の企業が出向いてきて、その会社に関心のある学生や研究員にインタビューをしていました。そして、多少でも脈があると思われると、「会社見学」と称して、費用は会社持ちで数日間の旅行が待っていました。これは他の大学では見られない光景でした。

岸研では、貝の毒 (サキントキシン) (図7) の合成というテーマを頂きました。サキントキシンの持つ3つ

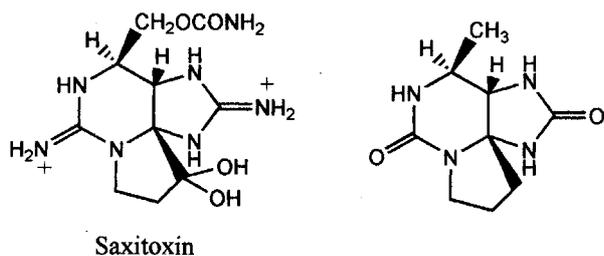


図7 貝の毒サキントキシンとそのモデル化合物

の不斉中心を1段階の反応で一挙に制御してしまう方法を開発するなどして、モデル化合物の合成は順調に進みましたが、毒自身の全合成は難しく、私がハーバード大学にいる間には終わりませんでした。私が京都女子大学に就職してから、メンバーを一新して全合成が完成したのですが、モデル化合物を合成したときと同じ経路をたどっての合成だったことは、私にとっても嬉しいことでした。

⑥京都女子大学で

1976年の4月、本学に就職させて頂きました。本学に就職する前には必ず上司がいて、勝手に研究を進めることができませんでしたので、「早く独立して自由に仕事がしたい。」と思い続けていました。しかし、実際に仕事を始めたとき、私の考えの甘さに気付きました。上司の方々が良い研究環境を調えるためにどんなに苦勞なさっていたかを思い知らされたのです。「どんな環境でも研究はできる。」と申します。与えられた環境の中で、できることを探し、できる方法を見出していくことが要求され、そこに研究者としての能力が試されるのではないかとこの考えに至ったとき、私はハタと困りました。自分の能力、与えられた研究体制、得られる研究費、等々を総合して考えたとき、それまで考えてきたテーマは実現不可能で、改めて方向転換を迫られたのです。

とりあえず、ジョンズホプキンス大学での仕事の続きから始めました。即ち、DNAに紫外線を照射したとき生成する化合物の中で、当時まだ合成的にはその構造が証明されていなかったもの (付加物; 図8) の合成を行いました。この時点で、有機化学をテーマにするのではなく、他の分野に有機化学を応用しようと考え、色々な人達との共同研究を模索し始めました。共同研究が成功したこともありましたが、不成功に終わったこともありました。

こうした中で、オーストラリアの Armarego 博士との共同研究は極めて順調に進み、Armarego 博士が定年で退官されるまで続けました。すでに述べたように、

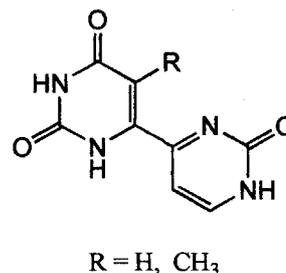


図8 DNAに紫外線を照射したとき生成する化合物 (付加物)

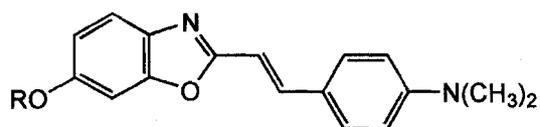


図 15 アルツハイマー病患者の脳切片に存在する老人斑に結合する化合物 (R はフッ素を含む基)

れました。Armarego 博士のようにメリハリの利いた生活を送らねば、と思いつつ私にはまだ真似ができずにいます。

Armarego 博士との共同研究が終わって数年後、滋賀医科大学との共同研究が始まり、現在はアルツハイマー病の診断試薬の開発 (例えば、図 15 のような化合物) を目指して合成を行っています。本学を退職した後も、しばらくはこの仕事を続けていくつもりです。

教育に関すること

学生の頃から学士の称号について考えていました。つまり、大学生の間に修得しておくべき最低条件は何かということです。会社に勤めていた頃、学士の条件とは、問題が起きたときにどのように解決したらよいか、その道筋を考えることのできる能力を持つことではないかという考えに到達しました。そして、本学に勤めるようになったとき、このことを学生たちには是非伝えたいと思いました。

そこで、毎年 4 月の最初の授業で、新入生を相手に「卒業するまでには、問題解決のための術を会得して欲しい。誰に尋ねたら何を教えて貰えるか? どこへ行ったらどんな情報が得られるか? どんな本を読んだら解決の糸口が見つけられるか? など。この能力を身につけたら学士の称号を貰ってよいと思う。本学は、この能力を養うのに理想的な大学である。本学には百数十人の教員がいらっしゃるが、二人と同じ専門の人はいない。だから、先生方に積極的に近づいて先生方から色々なことを吸収して欲しい。大学の先生方は、各々が多くの人脈を持っておられるから、一人の先生と仲良くなるということは、その何倍もの人達と知り合いになったと同じこと。本学に入学した利点を大いに活かして欲しい。」という内容の話をすることにしていました。これは、2000 年に大学設置基準の大綱化による組織替えで、一般教育の自然科学教室が消滅するのに伴って、食物栄養学科に移籍されるまで続きました (2004 年、新設の生活福祉学科に再び移籍)。しかし、現在の私には、このような話をする余裕はなく、ひたすらシラバスに沿って授業を進めていくのが精一杯です。

自然科学教室に所属していた頃には、主として一般化

学の授業を担当していましたが、身近な現象を主題に選びながら、その中身は化学の基本を教えるようにしていました。それは社会に出たとき、本当に必要になるのは応用力であり、応用力を養うには基礎を教え込むことが重要だと考えたからです。具体的な現象そのものについての解説は、学生にとっては分かりやすいでしょうが、学生の理解はそこで止まってしまいます。従って、よく似た現象が起きても、習ったことから演繹して考え、解析することが困難になります。面倒でも、現象の本質まで掘り下げて教育しておけば、似たようなことが起きた場合、即座に対応できるのではないのでしょうか。この点、物事を掘り下げて話をする時間が少なくなりつつある現状に危機感を覚えます。

近年、多くの大学が様々な資格・免許を与えるようになってきました。特に女子大でこの傾向が顕著です。これは、世間の要求と、受験生の確保を考える大学の思いが一致しての結果ですが、資格取得のための科目では、文部科学省や厚生労働省などの役所からの教育内容に関する注文が多く、授業の中で教員が自由に使える時間が少なくなってきており、この状況は憂慮すべきことです。大学が技術を教えるだけの場ではなく、人間を育てる場でもあることを再認識し、大学のあるべき姿について腰を据えて考える時期に来ているのではないのでしょうか?

受験戦争が熾烈になり、小、中、高を通じて知識さえ詰め込んでおけば、大学に入学できる時代です。卒業研究を遂行する上で、私はよく「考えろ。」と言いました。しかし、それに対して、最近「考えろというけど、何をしたらよいのか?」という疑問をぶつける学生が出てきました。「考える」という頭脳の労働が理解できないようです。そういう学生は勉強を暗記することだと思っているのでしょう。特に、化学は暗記の学問だと錯覚している学生が多いのには閉口します。

1992 年、オーストラリアに行ったときのことで、Cornforth 教授 (1975 年ノーベル化学賞受賞) の話を聞く機会に恵まれました。教授はイギリスの科学教育に触れて、「知識偏重の教育になっている。科学の本質すなわち、これまで正しいとされていることを疑い、確かめることの大切さを教える必要がある。ただ知識を教え込むだけでは将来が暗い。」とおっしゃっていました。イギリスの教育ですら Cornforth 教授には「知識偏重」と映っていることに驚きました。こうしてみると、情報過多で、知識偏重に傾くのは世界的な動きなのかもしれません。非常に残念なことです。

日本における知識偏重は、イギリスの比ではないと考えていますので、大学に入るまでに獲得した知識偏重の

勉強方法を転換させる必要があるかと思えます。その意味で、かつての教養部が今こそ日本に必要なのではないのでしょうか？一般教育の理念を専門教育の中に活かすという条件で、大学設置基準の大綱化が行われた筈ですが、専門教育の中に一般教育の理念が活かされているとは思えない大学が多いのが現状です。世界が混迷の度を深め、また世界における日本への期待が次第に薄らいでいる今日、バランスのとれた良識ある人間を創る必要があります。それには、リベラルアーツ教育をしっかりと行うべきではないのでしょうか。効率が悪いように見えますが、長い目で見た場合には結局早道であろうと思えます。会社にいた頃、上司であった大石係長に「専門で習ったようなことは、会社で再教育できる。重要なのは教養部で何を勉強したかだ。」と言われたことがあります。係長のこの言葉は、実社会においてもかつての一般教育の重要性が認識されていたことを示す一つの証だろうと思えます。

このように考えると、人間としての基礎を学び、専門の基礎となるべき科目群をしっかりと勉強した上で、専門教育に入っていくような体制が組めないものかと思えます。つまり、大学では専門の基礎までの教育で留めておくのです。この段階までなら4年間で十分でしょう。大学院に進んでから専門教育を行い、その段階で資格・免許をとる課程と学問を続ける課程とを分ければよいのではないかと思います。この形を取ることができれば、実社会に出たとき即戦力とまでいなくても、短期間に即戦力になり得る人材を育てることが可能になると思えます。英知を集めて大学教育のあり方について議論を深めていく時期にきているのではないのでしょうか。

京女でお世話になった人々（故人）

本学に就職してから、本当に多くの方々にお世話になりました。お一人、お一人ご紹介して御礼を申し述べたいところですが、紙面に限りがありますので、故人となられた方お二人に絞ってご紹介し、御礼を申し上げたいと思えます。

まず、布浦弘先生です。先生はもう随分前に亡くなりましたが、私が本学に就職するに際して大変ご尽力頂いたそうですし、就職してからも何かにつけてお世話になりました。しかし、当時は先生がどれほど私のことを考えて動いて頂いていたか理解できませんでした。今になって「あのときの言葉はこういう意味だったのではないか、あのときの行動はこういう意味があったのではないか？」などと思ひ返しています。

先生は1970年代から1980年代にかけて、家政学部長

あるいは短期大学部長として、また学園理事として大学運営に強力なリーダーシップを発揮しておられました。私は、既述したように、リーダーに批判的な立場を取ろうとしましたし、また家政学部の中で自然科学教室を守ることを布浦先生への恩返し、とも思っていましたので、食物学科におられた先生とは利害が対立することもあり、度々衝突しました。このため、一歩下がって考える余裕がなく、先生の考えておられる真意を測れないままになってしまったように思います。私の力不足を恥じ入っています。

私が就職したとき、先生がおっしゃったことは、次の3点でした。

- 1) 3年間はものを言わず、大学をじっと観察してくれ。
- 2) 正月の3日間は大学に来るな。守衛の仕事を増やされては困る。
- 3) 教育に反映しない研究はするな。

先生の3つ目の言葉は、私に研究と教育の関係について考えさせるきっかけにはなりましたが、先生がどのようなことを考えておっしゃったのか、今なおよく分かりません。私は、研究は未知のことを既知にする過程だと思っていますし、また人生は一瞬一瞬未知の世界に踏み込む過程だと思っていますので、研究は人生を考える際の良い材料になると考えています。従って、学生たちに研究を経験させること、また教員が研究して得たことを学生たちに話すことは、学生たちの人生に役立つだろうと思うので、いかなる研究であれ、研究するという行為自身が教育に反映すると考えています。この点について、今一度布浦先生とお話できたらと思います。

現在、家政学部は資格・免許が取れる学部として、多くの受験生を集めています。受験生を集めている要因はそれだけではないと思っています。今から20年、30年前に布浦先生を中心として行われた家政学部への投資が、今実を結んでいる面があることを銘記すべきでしょう。

最後に、今津晃先生について申し述べたいと思えます。今津先生は、第二次世界大戦前から、当時の敵国であったアメリカの歴史を研究され、アメリカ学会の会長も長く務められた方です。京都大学に現代史講座が開設されたときに、大阪大学から迎えられ、現代史の分野で大変活躍された方でした。京都大学では文学部長もされ、その当時の岡本道雄総長のブレンだったとお聞きしています。

先生は京都大学を定年で退官され、国連大学の副学長に推されていたのですが、それをお断りになって、本学の社会科学教室に歴史学担当の教授として来て頂きました

た。いつも「郷に入らば、郷に従えだ。」とおっしゃって、決して京大時代の話や、自らしようとはなさいませんでした。私が先生の経歴や業績を知ったのは、すべて先生のお弟子さんからの情報です。先生と私の出会いは衝撃的でした。1981年の秋、私がまだ41歳の助教授だった頃のことです。教授会が終わり、皆さんが会議室を出て廊下を歩いておられたとき、先生が突然、私を呼び止められ「お前にはがっかりした。ディスプレイし過ぎるし、生意気だ。」と大声で怒鳴られたのです。皆の前で突然怒鳴られ、ただ驚くばかりで、反論することもできず、そのまま部屋に戻りました。先生が何を思って怒鳴られたのかよく分からず、その時は虫の居所が悪かったのだらう程度にしか考えませんでした。

その翌年の4月からオーストラリアのキャンベラに1年間留学させて頂きました。そこで、Armarego 博士との共同研究が始まったのですが、時々今津先生に怒鳴られたことを思い出し、その理由を考えるようになりました。渡豪してから4ヶ月ほど経った8月のことですが、仕事のことでオーストラリア人と議論する中で、私が「他人に早く認めて貰いたい、良く思われたい。」という気持ちを持っていることに気がきました。そのとき、今津先生に怒鳴られた理由が、ようやく理解できたのです。私は嬉しくなり、早速、近況報告も含めて、先生にお礼の手紙を書きました。先生から返事があり、「怒鳴ったことも憶えていないし、何のつもりで言ったのか分からないが、とにかく帰国したら胸襟を開いてゆっくり話そう。」と書いてありました。そして、私が帰国したとき立派な料亭に招いて下さったことを今も鮮明に記憶しています。このことが契機になり、先生には頻りに食事に誘って頂き、時には親しいお弟子さんたちにも紹介して頂きました。

先生はお酒がエネルギーの源でしたので、私と一緒にいるときは、下戸の私に食事を勧めてご自身はお酒を飲んでおられました。食事の後は、お定まりのコースで飲み屋の梯子が始まりました。私はウーロン茶ばかりを飲んでお付き合いをしていましたが、先生はそんな私に構わず、盛んにアルコールを注文され、熱弁を振るわれました。そして、私に本当に多くのことを教えて下さいました。研究・教育に関する限り、たとえ分野が異なっても、全く同じ土俵で議論ができることを実感しました。先生に教えて頂いた中から、特に強く印象に残っている言葉を挙げておきます。

- 1) 人間は愚かな存在だ。だから勉強するんだ。
- 2) ディスプレイするな。謙虚になれ。
- 3) 王道を歩め。霸道に走るな。

4) 歯を食いしばって頑張れ。天は見ている。
先生は、もっと多くのことについて、例を挙げて教えて下さったのですが、紙面に限りがあるので、4つで止めておきます。私が行き詰って苦しんでいるときなど、「誰にとっても、勉強は苦しい。皆、我慢して頑張っているんだ。死ぬなよ。」と励まして下さいました。

真冬に食事に誘って頂いた時のことです。例によって飲み屋の梯子をしたのですが、なかなか話が終わらず、遂に開いている飲み屋が無くなってしまいました。そこで、四条河原町の阪急百貨店の前で座り込み、議論を続けさせて頂いたことは、今も忘れることのできない思い出です。夜が白々と明け始めてから、先生はご自宅に戻られたのですが、当時、先生は既に65歳を超えておられました。アルコールというエネルギーがあったとしても、コンクリートはさぞ冷たかったことでしょう。私は、当時の先生の年齢に近づきつつありますが、後輩の為にそれだけのことができるかどうか自信がありません。先生には本当に頭が下がります。

先生が本学をご退職になった後も、時々お宅にお邪魔してお話を伺っていたのですが、2003年6月、86年の生涯を終えられました。亡くなる1ヶ月ほど前お宅にお見舞いに行き、少しお話をさせて頂いたのですが、先生と二人で、三高寮歌と八高寮歌を大声で歌ったのが、最後の思い出になりました。

「ネオコン」は、今でこそ日本でポピュラーな言葉になりましたが、「ネオ・コンサーバティブ」という言葉を今津先生から最初にお聞きしたのは、レーガンがアメリカの大統領であった頃、日本では中曽根首相の時代でした。先生は「この連中が台頭してくるからよく観ておくように。」とおっしゃっていましたが、その頃すでに世界の行き着く先を見通されていたように思います。今、先生がご存命なら、どのように分析されるのでしょうか？世界情勢、日本の政局、教育界、ひいては本学のことなど、もう一度先生と膝を交えて話をさせて頂き、先生のご意見を伺いたいと切に思うこの頃です。

謝辞

私は多くの諸先生や諸先輩、同僚、後輩たちに恵まれ、幸せな半生を送ることができました。お世話になった皆様に心から御礼申し上げます。

また、私の仕事を遂行するには、実験に多くの時間を割かねばなりません。従って、田辺製薬時代から、日曜・祝日に出勤することも多く、家族には寂しい思いをさせ、迷惑をかけました。にも拘わらず、それを快く許してくれた家族に感謝しています。

最後に、1976年4月以来、30年の長きにわたり勤務
させて頂き、私と私の家族を支えて頂いた京都女子大学
に厚く御礼申し上げます。

本学のますますの発展をお祈りしながらペンを置くこ
とに致します。